

## 大阪と堺の石碑に刻まれた

### 先人の災害遺訓

東京大学地震研究所 都 司 嘉 宣

紀伊水道から四国の南方沖合では、南海地震と呼ばれるプレート境界型(海溝型)の巨大地震がおおざっぱに100~150年ほどの間隔で起きている。昭和21年(1946)12月21日に起きた昭和南海地震の1周期前の南海地震は、幕末の安政元年(1854)十一月五日の安政南海地震である。そのさらに一周期前の南海地震は宝永四年(1707)に起きた宝永地震である。

南海地震は東海沖の地震に連動して起きる傾向がある。昭和19年東南海地震の2年後に昭和南海地震が起き、安政南海地震は前日の安政東海地震の約32時間後に起きたものである。南海地震が起きると、地震発生後約2時間後に大阪の市街地を流れる堀に津波が押し寄せる。大阪とその南の堺の町に残された石碑に安政南海地震の津波の様子が記録されている。これらの石碑の文章に先人の残した災害教訓を読み取ることができる。

大阪市大正区のJR大正駅近く、安治川と木津川の合流点付近に大正橋がかかっている。その橋のもとに、「大地震両川口津浪記」と題する石碑が建っている。安政南海地震(1854)の翌年、安政二年(1855)七月に大坂・幸町五丁目の船場によって建てられたものである。

その文には安政元年(1854)六月十四日の伊賀上野地震による大阪の様子、十一月四日の安政東海地震の大阪での震度四程度はかなり大きな揺れを感じて、多くの人が小舟に避難したことが書かれている。石碑には、続いて翌五日の南海地震の記事が現れる。すなわち、申刻(16時)の本震の揺れによって、大阪では家の崩れ、出火も生じた。本震から2時間ほど経過した日暮れごろ、大津波が押し寄せ、安治川、木津川に山のような大波が入ってきた。地震の避難で大勢の人が乗りこんだ多数の船が川の上流に押し流され、橋にうち当たって転覆し、橋は落ち、さらに後から流されてきた船が折り重なった。この津波のために大阪全体で死者341人と伝えられる。石碑の文はさらに続く。

「今より百四十八ヶ年前、宝永四丁亥年(1707)十月四日の大地震の節も、小船に乗り津浪にて溺死人多しとかや。年月へだては伝へ聞く人稀なる故、今亦所かはらず彩しき人損し、いたましきこと限なし」。

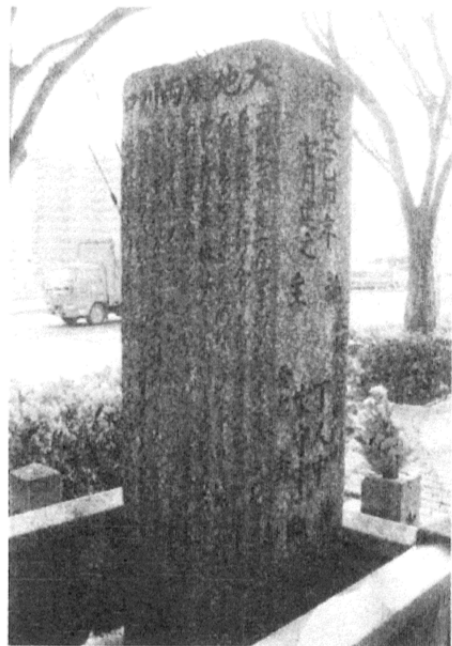
すなわち、148年前の宝永4年(1707)の南海地震でも、地震からの避難のために船に乗った人がおおぜいいて津波で溺れ死んだ。長い年月がたったので、この言い伝えを知る人が少なくなり、今またむざむざと

同じように船に乗って同じ原因で死者を多く出すことになってしまった、というのである。先人の残した教訓を生かすことができなかつた悔しさが文面ににじみ出ている。このあと石碑には後世の人へ教訓を残す文章が続く。

「後年又はかりがたし。すべて大地震の節は津浪起こらんことを兼ねて心得、必ず船に乗るべからず」。すなわち、将来又同じように地震が起きるかも知れない。大地震の時はいつでも津波が起きることをあらかじめ知っておいて、決して船に乗ってはいけない、というのである。さらに碑文には、「火の用心肝要なり」、「川内滞船は水勢おだやかなる所をえらび繋ぎ換え、囲い船は素早く高いところへ移せ」と現代にも通用する地震津波の緊急対策が書かれている。そうして、碑文の末尾はこう締めくくられている。「願わくば心あらん人、年々文字よみ安きよう墨を入れ給ふべし」、すなわち、この石碑の意義を理解してくれる人がいましたら、この石碑の文字がいつまでも人々が読みやすいように、どうぞ毎年墨を入れてほしい、というのである。そうして、この石碑には今も黒々と墨が入れている。この石碑を建立した家の子孫の人が毎年墨を入れ続けているのであるという。

われわれはこの石碑の建立者の子孫にたいする深い配慮と、周到な用意に深く敬意を表すべきであろう。いま、大阪に住む人は、この石碑の建立者の教訓と重い意志に答えることができるであろうか？

大阪市の南に隣接する堺市の大浜公園にも、安政地震の記念石碑がある。こんどはこの石碑の碑文をみておこう。



安政南海地震の津波被害を伝える大阪市大正区の石碑  
(西山昭人氏提供)

この碑文もやはり、安政元年六月の伊賀地震、十一月四日朝の安政東海地震の揺れの記載から始まっている。それに続けて、翌五日の安政南海地震による揺れを記したあと、暮れごろにわかに津波が川筋に激しく入り、また激しく潮が引いて川岸につないだ船のとも綱、錨綱が切れて船が漂い始めた。船は橋にぶつかり、八ヶ所の橋が落ち、船も破損した。しかし、堺の住民は地震津波に壊された家もあったがみな神社の庭に集まって避難したためにけが人ひとりとして出すことがなかった。これは昔宝永年間にこのたびと同じように地震津波があったとき、船で避難して、多くの人が津波で死んだということ、はっきり知っていたために今われわれは助かったのである。堺の人がこのように助かったのは誠にあり

がたいことと、産神神明宮三村宮、天満宮に感謝し、幣をささげ、後の世の子孫も同じように災害を免れるようにとお祈りをした、と碑文に書かれている。

堺の人は賢明であった。宝永地震津波の伝承をちゃんと生かし切り、地震の揺れに対しても船に乗って避難しようとはせず、集落の小高い土地にある鎮守の神社に避難してけが人1人も出さず、この災害を乗り切ったのである。この石碑は、当時の堺の

人の誇りをにじませて、現代にまで碑文の文面として語り伝えているのである。

以上、大阪の大正橋の石碑と、堺市大浜公園の石碑は、災害に昔の教訓を生かせなかった大坂の人々の悔しさと、生かし切って住民を守った堺の人々の誇りを、それぞれ対照的に語りつつ、子孫に教訓を示し続けている。

現代のわれわれが、これらの石碑に刻まれた先人の災害教訓をさらに生かして、被害の軽減に役立てることはできるであろうか？